



第16号

平成28年7月25日発行
 会員募集中
 年会費 3,000円
 10月以降入会 1,500円

設立5周年記念平成28年度定期総会を開催

退任の山本敦前事務局長に感謝状贈呈



▲総会壇上

平成28年度の定期総会が4月29日、山陽新聞社さん太ホールで行われた。約220名が参加。平成27年度の事業報告、並びに新年度の事業計画が提案され、承認された。それに伴い、年会費を2,000円から3,000円に上げる案が提案され、承認された。そして、役員の変更が行われ、新たに、事務局長を山崎副会長が兼務、そして留任も含めて新たに12人の運営委員の案が提案され、承認された。議案審議終了後、発足準備段階からご尽力いただいた山本前事務局長へ退任にあたって、天野会長から感謝状が贈られた。

続く記念講演
 では、元岡山市立
 オリент美術館館長

▲植田心壮氏

植田心壮氏による「現地探訪二宮金次郎は生き



ている」と、東大教授山本博文氏による「忠臣蔵の真実—彼らは何のために討ち入ったのか」と題する講演が行われた。

植田心壮氏は昨年『現地探訪二宮金次郎は生きている』という著書を発表された。県内の二宮金次郎像を調べられ、多くが備前焼の3つの窯元で製作されているとのこと、そして形、作りが少しずつ異なっていることを話された。

東大史料編纂所教授山本博文氏は津山市の出身、NHKの番組『先人たちの底力 智恵泉(ちえいず)』でもお馴染みである。忠臣蔵で知られる赤穂浪士事件の顛末について史実を基に話をされ、結局、大石内蔵助ら赤穂浪士47名は武士道を貫くために吉良邸に討ち入ったと話された。



▲山本博文氏

総会后、会場を移して懇親会が行われた。約40名が参加。テーブルごとにこの5年間の思い出、反省、さらには今後の展望等について忌憚のない意見が交わされ、各代表がスピーチで披露した。

最後に、これまで精力的に事務局長を務めてこられた山本敦氏、ご夫人の洋子さんへ感謝の意を込めて花束の贈呈が行われた。

歴研展望

「次の設立10周年に向けて」

会長 天野勝昭

梅雨明けとなり、真夏日という気温の高い日が続いております。

お互い体調管理に気を付けましょう。

今年度も4月29日の定期総会から活動を展開して参りましたが、事務局長の交代もあり、本格的な活動はこれからで、会費3千円への値上げをご承認していただきながら、常設委員会もメンバー交代で具体的な動きもこれからで、活動計画を皆様にお知らせできていないことを心苦しく思っております。

新しい取り組みとして、歴研サロンを従来の会場だけではなく、県下を巡回する形として、備前、備中、美作の三か所で順次開催していきたいと考えております。更に、有志が集うミニ研究活動や会報でも各自の研究成果を発表できるスぺ

ースを設けること等、少しずつでも実現していければと思っています。

設立5年を経過した岡山歴史研究会としては、次の10周年に向けて、発足時に意思統一しました「活動基本方針」で「会員それぞれの研究活動、他団体における活動は自由を旨とし、情報交換や成果の発表につなげていき、会報の発行や研究成果の刊行を進める」とお示ししておりますように、「研究会」という名称と活動内容がマッチしていると外部の方にもご理解いただけることをテーマに活動していこうとしております。皆様のご理解、ご協力、ご尽力を改めてお願いする次第です。

今年度も何卒よろしく願いいたします。

事務局長就任挨拶

副会長・事務局長 山崎 泰二

今年の定期総会にて、山本敦事務局長の後任に、私、山崎が担当になりました。微力ですが、尽力致します。

平成22年、130名でスタートしたこの会も、現在では261名です。天野会長以下、運営委員一同、心を引き締め、邁進させていただきま。ご指導・ご鞭撻、又ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

ホームページや会報には皆様の自由な活動の場としての役目もございます。「仲間を集めたい」、「小さな論文を発表したい」等の場合、事務局が相談に乗ります。大いにご活用ください。

新事務局は、新岡山港のある、岡山ふれあいセンターの近くにあります。有限会社防災システムにて、当会の備品の格納場所を確保しておりますので、気楽にお立ち寄り下さい。

今回の総会で以下の方々が運営委員に決定しました。その担当は、下記のとおりです。

各常設委員会名と委員長及び委員

- ・企画委員会・・・委員長 稲見 圭紅、雪吉 政子、濱手 英之
- ・加ソ 委員会・・・委員長 山田 良三、丸谷 憲二、長安 登美江
- ・事業委員会・・・委員長 工藤 博、井上 秀男
- ・編集委員会・・・委員長 楠 敏明、中山 亘、雨坪 寿則

歴研サロン委員長を引き受けて

歴研サロン委員長を引き受けました。これまで何度も参加し、講師も担当しましたが、運営に参加するのは初めてです。これまで大勢が参加し、盛り上がってきた処なので荷が重いです。

「歴研サロン」とは、開催の趣旨とは、と、尋ねてみると「みんな歴史が好きなんだなあ！」ということです。テーマは実にさまざま。古代から中世・近世・現代へと続くが、皆、一様に郷土の歴史に関心がある。歴史には

サロン委員会 委員長 山田 良三

広がりがあり、ある地域や時代だけでは捉えられない。「サロン」の趣旨に照らして、参加者の要望と期待に応えられる企画、行事を行いたい。「歴研サロン」に興味と関心をもって是非、ご参加いただきたい。



事業委員会 今後の展望

歴研も成長期の6年目に入って、体制も変わり今年からの事業運営の事業委員長にはズブの素人の工藤が就きました。事業委員会は歴史探訪、歴研ウォーク、定期総会運営等、歴研の重要な位置付けにあって、とても事業委員だけで運営がなるものではありません。ひとえに会員の皆様のご指導、ご協力のもと、参加して良かった、為になった、楽しかった、さすが歴研だと言われるよう

事業委員会 委員長 工藤 博

な活動でありたいと考えています。

探訪してみたい、紹介してもらいたい、あの先生のお話を聞きたい等々を提案して下さることを是非お願い致します。



新任教師のころの思い出

人生は不思議な“めぐり合わせ”の連続である。つまり“運”である。人生は“努力”という人もいるが、“運”が悪いと努力する元気も出てこないものである。

近ごろ大学では「教育と研究」をよく言うようになった。「研究」だけでは駄目、「教育」にも力を注げ、ということらしいが、私の教師生活を振り返ってみると、「教育」と「研究」は対立するものではなく、「教育」のための「研究」であったと思う。よい「教育」、良い「授業」をするには旺盛なサービス精神が必要だが、そのサービスは、充実した「研究」の裏付けがなくてはならない。この生徒に対するサービス精神と「研究」意欲を育ててくれたのは、わたしが最初に赴任した岡山県立林野高等学校であった。そこで、3年間、学校生活を共にしたのが、同校の昭和31年度卒業の諸君であったが、その諸君との出会いがまことに妙なめぐり合わせであった。

昭和28年3月大学を卒業するとき、附属中学校の話があったが、附属の忙しさは教育実習に行ってもよく知っていたから、不器用なわたしは不向きと判断して断りぶ

名誉顧問 柴田 一

らぶらしていた。そこへ林野高校の校長が「急に社会科の先生が辞めまして」といって大学に求人にみえた。当時就職未定者はわたしだけだったから、当然私に白羽の矢が立った。林野高校という名前はおろか、林野がどこへあるかも知らなかった。それでもすぐに返事をせよといわれ、訳もわからないままにお請けした。当時は今のような採用試験なんてものはなかった。校長のお眼鏡に叶えば採用である。

着任して頂戴した教科書は山川出版社の「世界史」。わたしの専攻は日本史。世界史なんて聞き始めである。旧制中学でも新制大学でも、東洋史・西洋史で勉強した。それも体系的には習ってない。しかし新学期は情け容赦なく始まる。あくる日の50分の授業を何とか持たせるには、前日に話の内容を頭に叩き込んでおかねばならない。毎日がまるで試験勉強であった。緊張のあまり食欲がない、というより飯が喉を通らない。田淵屋という旅



館に下宿していたが、その下宿の婆さまが、「先生、お若いのにえらく食が細うございますなあ」と心配して下さったほど。こんな純情なむかしもあったのである。



こんな新米教師の授業でも、必死な気持ちが伝わるのか、生徒は私語も居眠りもせず熱心に聞いてくれた。生徒が質問をしても明快には答えられない。我ながら訳のわからぬ答弁をしても、生徒は心得たもので、「はい、よくわかりました。」追いつめ問いつめて、先生に恥をかかせるようなことはしない。当時の生徒は思いやりがあり、「武士の情け」を心得ていたのである。

2年目にはやっと日本史担当になり、2年C組の担任で地歴部の顧問になった。

2年目にはやっと日本史担当になり、2年C組の担任で地歴部の顧問になった。

そのころは少し心のゆとりも出来たので、生徒たちと地域調査をやった。わたしにとっては「地域教材」の掘り起しである。生徒諸君が、家にあったといって古文書を持参してくれたり、古文書を所蔵する旧家へ自転車で見学案内してくれたりしたものである。その調査結果をときどき授業の中へ取り入れる。地域の話だけに熱心に聞いてくれるわけ。

「林野はむかし倉敷といってえらく繁盛したもんだ。その活力の源泉は高瀬舟だった。その高瀬舟がいまでは吉野川に一艘もおらん、なんでやろう。バス・トラックの登場する前から高瀬舟稼ぎは衰えておった。なぜか、その謎を解く鍵がこの古文書にかくされている。」「高瀬舟の積荷には、儲かる積荷、農民・商人の重い荷物と、儲けの薄い積荷、領主が江戸・大坂へ送る年貢米とがある。米相場が高くなると、年貢を銀納でなく、米納にし、大阪の堂島で高く売る。船賃は一方的に安く抑える。そのため高瀬舟は年貢米の輸送に取られて、儲かる荷物が運べない。それが高瀬舟が衰えるカラクリじゃったんだ。古文書は教科書にないことも教えてくれるんだぞ。」

こんな研究資料がたまって、論文や著書になったわけである。しかしC組は就職組が多かったせいか、勉強勉強と口うるさく言った覚えはない。よく注意したのは服装と清掃のことである。「襟のホックを掛ける」「室内で帽子をかぶるな」。これがわたしの口癖になったほどである。長髪も禁止になり、生徒たちに断髪を命じたが、ひとりH君だけは断固として断髪しない。「先生が刈ったら君も刈るか」と尋ねるとH君「先生が刈ったら刈るよ。」まさかわたしが断髪するとは思わなかったのである。そこでH君を連れて町の散髪屋へ行った。「先生、

本当に刈るんですか」散髪屋の主人が何度も念を押した。口にした手前、もう引っ込みがつかない。額の上にバリカンを入れると、漆黒の黒髪が音を立てて落ちた。眼を開けてみると何とも無惨。断腸の思いとはこのことかと思った。その生徒が誰であったか長い間忘れていたが、私の還暦祝いをこの学年の連中が岡山国際ホテルでやってくれたとき、「先生に頭髪を刈らした犯人はわたしです」と名乗り出てくれたので思い出した。あれからどこへ転勤して断髪の話が出て、「まあ先生方が髪を刈ってみて、気分がよかったら生徒に髪を刈らせましょう」ということにした。当時交際していた女性があったが、彼女が急によそよそしくなった。その時は訳がわからなかったが、後年その理由を聞くと、急に頭髪を刈って坊主になったので、急に気が変になったのかと思った由。断髪はえらい損害だった。



3年目は3年B組の担任。掃除は校舎から校門周辺までが担当区域。

1学期のころ生徒K君が「先生、雨が降ってきました。校門の掃除はしないよろしいか」と聞きにきた。わたしは「人間の体はなあ、これ位の雨には溶けりやせん。もの共つづけ！」とばかり、竹箒を持って雨の駆け出したものである。2学期になった。雨降りの日、「今日は雨がふっておるで、校門の掃除はやらんでよろしい」とK君たち「先生、人間の体はこれ位の雨では溶けません」わたし「そうか。わしは雨に濡れるのは好かん。軒の下でみとるわ」。生徒諸君はわたしに大見得を切った手前もあって、雨の中を勇敢に掃除したもんだ。そして3学期。その頃はもう掃除の監督にも行かなくなった。「先生、掃除が済みましたから見に来てください」と職員室にやってきた。「君が見て掃除の出来はどうやった?」「大変良くできたと思います。」「君が見てよく出来ているものを、わしがわざわざ検査に行く必要はない。解散させなさい。」といった具合で、1年後には掃除の監督も検査も必要のないクラスになった。

林野高校には伝統的に、冬期にマラソンをやっていた。女生徒は8km、男生徒は14kmで毎年コースは決まっていた。わたしは旧制中学時代マラソンの途中、腹痛をおこし落伍した経験がある。何時か名誉挽回をと思っていたし、担任でもあるので生徒と一緒に走ることにした。しかし自信がなかったので、事前に人が寝静まった深夜に起きて女生徒のコースを走ってみた。時間はかかったが完走できた。そしていよいよ本番の日。女生徒の

コースも考えたが、若い教師が女生徒と一緒に、完走しても男生徒になめられると思い、つい突っ張って男生徒の14kmに挑戦した。3km、湯郷辺にさしかかると



と心臓は破裂しそうになる。もうやめようかと心に惑いが生じたとき、篠井校長が自転車に乗って後ろから、「柴田君頑張れ。帰ったらゼンザイをくわすッ」と声をかけて下さった。その言葉に励まされ、

気を取り直して完走した。帰ってみると男生徒も女生徒もみな完走していた。これには驚いた。でも考えてみると、当時の生徒は通学に片道2里や3里は普通であった。平素の鍛え方が県南の高校生とは違うのである。この持久力・忍耐力が林野高校独特の大型晩成型でしかも痛快な人間を育てたように思う。

その頃から岡山県でも同和教育が始まった。当時は岡山県では「民主教育」といった。若手教師で社会科担当というので、わたしが本校の「民主教育」係になった。あった。ある時林野の町のある寺院で「民主教育」の講習会があった。地元の部落解放同盟・地元教育委員会・地元小中高の「同和教育」担当の先生たちの集まりだった。その時町の教育長のK先生が「民主教育」無用論を堂々と展開した。部落を知らぬものに「民主教育」をすれば逆に部落差別を知らせ、放っておけばなくなる差別を、逆に助長することになる、というような話であった。部落解放同盟の皆さんは勿論「民主教育」必要論である。その必要性を力説されたが、要するに「水掛け論」であった。そこで「現場の先生のご意見は？」ということになった。そこでわたしは、「世の中に無知ほど怖いものはない。無知が偏見を生み、偏見が差別を生む。無知は不発爆弾、いつ爆発するやらわからない。無知な人間を賢くするのが「民主教育」、他県でいう「同和教育」ではありませんか。」まあそんなことを言った覚えがある。結果的に、新米教師が、老練の教育長の意見に真正面から反対し、解放同盟の肩をもつ形になった。これで「アカ」のレッテルを貼られてしまった。

その「アカ」が「マッカ」になったのがその年の運動会の仮装行列であった。3年B組では、全員参加を条件に仮装行列を考えた。それでもできれば景気の良い仮装行列がよい。そこで誰ということなく提案され決定したが、当時世間の話題になっていた「砂川事件」という騒動である。これにヒントを得て労働争議の仮装行列をやることになった。女生徒が警察官、男生徒が労働者。赤旗はT君の父親が共産党の支部長であったので、頼んで

本物の赤旗を借りてきた。生徒は皆放課後に「立てたくましき労働者」という「労働歌」を稽古した。そうして本番に臨んだから3年B組の仮装行列は、真に迫って迫力があつた。見物していたわたしまで、生徒たちが行列の中に引きずり込み、私も一緒になってデモをやった。

それを見てびっくりしたのが来賓席のK教育長である。「教員が、生徒の先頭になってデモをやっている。けしからん。」という訳。教育長は、よく見ると先日の「アカ」教員であるから、これは誠にしなければと思ったかも知れない。しかし並んでみていた篠井校長は後に岡山県の教育長になる大物で、役者が一枚も二枚も上だった。少しも慌てず、「仮装行列ですがな。芝居の中の泥棒と同じまさか御用という訳にはいきませぬが。」これでK教育長も黙ってしまった。それにしても一言のお咎めもなく済んだものだ。この話は大分後に酒の席でむかし話として聞かされたことである。

3年B組は半分は大学の受験性であったが、受験の結果は惨澹たるもので、秋の木の葉のように、はらはらと落ちてくる。新米教師の悲しさで、受験指導・進路指導の失敗である。「先生、A君が試験に失敗したと言って、布団をかぶって泣いているよ。放っておいていいんですか。」とN君が注進にやってきた。「どうしたらいいのかなあ。彼は図体は大きい気は小さい方やからな。」「先生、この際ひとつクラスの全員を集めてパーと派手にやりませんか。幸い落選仲間が多いから。みんなで景気よくやればA君だって元気出しますよ。」「落選祝いか。あまり聞かぬ祝だがひとつやるか。でも集まるかな。」

「先生、大丈夫。寝てる奴は叩き起こし、単車に積んで連れてきます」というような訳で、湯郷のT君とこの旅館加茂屋を会場に大宴会を催した。当選組も落選組も一緒、クラス全員参加である。飲むほどに酔うほどに、秋の木の葉も景気よく舞い上がった。「先生、来年を見て下さい。来年は絶対全員合格して当選祝いをやりませぬ。」秋の運動会の仮装行列を盛り上げた「労働歌」が湧き起った。その歌は3年B組の連帯と友情の絆となり応援歌となった。その3月、諸君の卒業を見届け、わたしは県南の県立天城高校に転勤した。しかしこの期の諸君とのつながりは絶えることなく今日まで脈々と続いている。仲間の結束は年とともに強化されている。来年は彼や彼女も60歳。同期生全員の還暦祝賀会を、岡山駅前岡山会館ですることになっている。こんな学生は23年のわたしの高校教師の生活の中でも他にない。新米教師のわたしを育ててくれた生徒達。わたしが今日あるのは彼らとのめぐり合わせのおかげだと思っている。

「乞食行脚の清僧 良寛禅師の思想形成とその実践」を聴いて

藤原 康正 (会員)



▲中山亘氏

5月19日 当会運営委員の中山亘氏を講師に「乞食行脚の清僧 良寛禅師の思想形成とその実践」というテーマで第14回歴研サロンが行われた。参加者は40名。第4回

歴研サロン、連続講座に続いて3回目の講演である。ご自身が作成されたレジュメ、良寛禅師の略年譜、資料集をもとに約3時間びっしりとお話された。

講演はまず書物による良寛との出会いから良寛という人間像を話され、なぜ今もなお良寛の生き様に共感し、親しみ惹かれる人が多いことか、なぜ全国38ヶ所に良寛を慕う『良寛会』ができているのか、なぜ数え切れないほど多くの研究書、小説、子供向けの本が出版されているのかを説明された。

良寛は越後の名主の嫡男に生まれたが、名主見習いとして失格し、出家の道を選んだ。玉島円通寺では約11年間の厳しい修行を経て「和尚」の資格を得た。良寛は「和歌、漢詩、書」の達人で(3つの道に優れた人は他にみられない)逸話も5百以上残っ



▲円通寺

ているが、玉島時代の作品は非常に少なく、円通寺での修行、エピソードに関する記録も少ない。しかし、中山氏は円通寺での修行時代がなければ後年の「身心脱落」の人は存在しない。後年の「孤独」と「清貧」の生活は、この玉島時代に生まれ準備されたと話された。

円通寺を離れ、諸国乞食行脚放浪の旅へ出たが、なぜ旅に出たかは謎が多い。中山氏は道元の課題「愛語」の実践の旅であり、公儀批判を封印し、権門への接近を戒め、「愛語」の言辞施による教化活動と要約

する。

乞食放浪のあと円通寺を辞して越後へ帰郷する。中山氏は父や弟の自殺の衝撃が大きく、名主の嫡男ながら出家した懺悔の念が強まったと説明された。帰郷後は多くの人々と交流し、特に良寛70歳の時の30歳の尼僧、貞心尼との心の交流を話された。良寛没後発行された「蓮の露」は良寛の思想性と芸術を後世に遺したことで有名である。74歳で弟や甥、貞心尼に看取られ遷化した。葬儀には多くの僧侶、人々が会葬した。辞世の句は有名である。



▶良寛和尚

「散る桜残る桜も散る桜」
「裏を見せ表を見せて落ち葉かぬ」

講演を拝聴した感想は、倉敷に生まれ育ちながら私が良寛について知っていたことは円通寺で修行したことや後年の子供と戯れる姿ほどである。

良寛は幼少期自閉症であったこと、世渡りができない不器用者であったこと、乞食行脚の放浪の旅へ出たこと、歌人、詩人、書人であったことなど驚くことばかりである。中山氏のお話や、年表、資料を確認しながら良寛の全体像を少しでも掴むことができたのではなかろうか。良寛は謎が多く、奥が深い人物で3時間ほどの講演で話し終えることはできないと中山氏が言われる所以である。余談であるが倉敷市民としては恥ずかしいと思ったことは、良寛の法兄の仙桂和尚の庵、水月庵が草ぼうぼうで手入れがなされていないことである。何とかならないものか。

最後に、中山氏とは歴研サロン委員を一緒にさせていただいたが、議事の合間にコメントされるお話がおもしろく、歴史を広く深く理解されている方だと感じた。サロン委員会が今回も無理をお願いしたのは、中山氏には今後もいろんなテーマで講演をお願いして欲しいとの会員からの要望が多かったからである。個人的には僭越ながら、お体には十分気をつけられ、今後もわれわれ後輩にご指導をまだまだお願いしたいと思うばかりである。



▲円通寺の良寛堂

国宝、重要文化財が眠る 林原美術館

吉備文化を楽しむ会 杉村 勝子

林原美術館は岡山市北区丸の内、岡山城内堀の西側にあります。ここは、もともと岡山城二の丸屋敷で、対面所（今でいう迎賓館）があったところです。林原一郎氏（1908～1961）は祖父以来の水飴製造業を継いでこれを発展させ、戦後特に急激な成長をとげ、日本最大の水飴工場をつくるなど、漸く岡山財界に重きをなしましたが、一方で、その古美術愛好にも見るべきものがありました。

既に学生時代から刀剣の鑑賞、研究に没頭、やがて蒐集に進み、鑑識眼の充実と共に、戦後特に名刀を多く入手し、岡山の刀剣蒐集家としては1、2を争うまでとなりました。そして、さらに広く日本および東洋古美術の全般に眼を向け、この方面の蒐集にも精力的に活躍しました。然し残念なことに昭和36年4月、52才の若さをもって逝去、遺志をついで、ご遺族、当時の県知事三木行治氏などの知友が相はかって設立し、岡山市で初めて開館したのがこの美術館です。

昭和36年7月財団設立、38年9月館舎竣工、39年10月1日開館、敷地面積6,382平方メートル、床面積1,919平方メートル、展示室面積450平方メートル、他に土蔵3棟計336平方メートルとなっています。展示室、ロビーを中心とした本館の設計は前川国男建築設計事務所で、岡山城周辺の景観に調和した近代建築が生まれました。美術館の入り口には戦禍を免れた長屋門が建っています。本瓦葺の屋根に海鼠壁のどっしりとした構えで、来館者をお迎えし、赤レンガが印象的な本館へと続きます。財団設立当初は「林原美術館」でしたが、開館時「岡山美術館」と改め、昭和61年再



▲林原美術館の入口

びもとの名称「林原美術館」に復しました。主な収蔵品は、旧岡山藩主池田家より引き継いだ大名道具類と、林原一郎氏が個別に収集した日本・東洋の古美術品から成ります。刀剣、武具、甲冑、刀装具、鍋島焼を中心とした陶磁器、能装束、能面、書跡、絵画、彫漆、螺鈿、蒔絵、金工等で、国宝3件、重要文化財26件を含む約1万件を収蔵しています。

活動の中心となる展覧は、常設展示は行わず、収蔵品の中から独自のテーマを決めて展示する企画展、他館の優れたコレクションや選りすぐりの収蔵品を紹介する特別展をあわせて年間4～6回開催しています。さらに、日本の伝統文化の啓蒙活動として、他館の展覧を見学する「美術館巡りの旅」、伝統工芸に親しむ「ワークショップ」、庭園に建つ茶室での「お茶会」、収蔵品の理解を深める「林原美術館講座」、展示室内で作品とともに楽しむ「コンサート」などを年間を通じて開催しています。

また、「友の会」を設け、林原美術館をより身近に感じていただけるよう、入館料の割引制度、いち早くに展覧会・イベントごとの情報を送付、「林原美術館NEWS」のお届け、スタンプラリーで林原美術館関連グッズのプレゼントなどを行っています。

一般財団法人 林原美術館

〒700-0823 岡山市北区丸の内2-7-15

TEL 086-233-1733



第32回 全国大会
美し国三重・津大会 案内
 “伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ〜♪”
 ～伊勢の商人、文化人の地を旅する～

日時：10月21日（金）～23日（日）2泊3日
 場所：1日目 [会場] ホテルグリーンパーク津
 式典 13:30～14:20(受付12:30～)
 講演 14:30～17:30
 祝宴 18:00～20:00(アトラクション)
 : 2日目 見学会 8時出発
 伊勢別街道を巡る
 津城跡・関宿・高田本山専修寺など
 : 3日目 見学会 8時出発
 伊勢街道を巡る
 宝塚古墳・松坂城・商人の町など
 参加希望者は、8月10日までに山崎事務局長まで
 連絡してください。

秋の探訪会 案内

矢掛町の「宿場まつり大名行列」に合わせて
 探訪会を計画しました。ご参加ください。

日時：11月13日（日）7:40 集合
 場所：総社～真備～矢掛～鴨方方面
 集合：岡山駅西口 7時40分
 募集人員：50名（先着順）
 参加費：4,000円（昼食代、保険料含む）
 予定コース：岡山駅西口発8:00 着18:00
 ・総社（こうもり塚古墳、石畳神社、
 宝福寺の熊山鐘、総社宮等）
 ・真備（下原の重文宝篋印塔、
 有井の吉備真備のうぶ湯）
 ・矢掛（宿場町大名行列の見物、昼食）
 ・鴨方（天文台下の地藏岩、遥照山天文台）
 （注）一部変わることもあります。
 下記の電話・FAX・Eメール・葉書へお申し込み下さい。
 氏名・生年月日・住所・電話番号（携帯とも）



お知らせ 次回 運営委員会

日時：8月19日（金）午前9:30～
 場所：ゆうあいセンター大会議室
 議題：①第2回運営委員会後の活動報告
 ②4常設委員会の運営
 ③今後の活動計画

申込み先（締切 9月25日）

・電話：井上秀男 090-6412-9796
 ・FAX：藤原康正 086-451-6038
 ・Eメール：工藤 博 sw225442@cb3.so-net.ne.jp
 ・葉書：工藤 博 〒710-0803 倉敷市中島2007-8

編集後記

岡山歴史研究会は6年目に入りました。2千年を有する郷土の歴史について、どこから手をつけるべきか、迷いの連続、出たとこ勝負でこれまで会報を編集してきました。生まれ育ち、外に出て、内から観て、故郷、岡山には至る所に歴史が息づいていることに気がきました。保守的、動かない、伶俐的と云われようともそれも歴史がなす所以で誇るべきものではないかと思えます。それを意識して編集するのも一つの方法ではないかと考えています。

気分を一新するために従来の縦書きのスタイルを横書きにしてみました。どうでしょうか、皆さんのご意見、ご感想をお寄せ下さい。

先般、名誉顧問、柴田一先生を施設に尋ねました。元気で療養されています。先生の原点、初任地、林野高校での奮闘ぶりを書かれた手記をお借りして、掲載しまし

た。これは先生が以前、就実女子大学文学部広報に寄せられたもので、転用させていただきました。

実業家、林原一郎氏が集められた歴史的資料が一堂に収められている林原美術館は話を聞く度、見せていただく度に感心するばかりです。紹介させていただきました。（楠）

発行 岡山歴史研究会
 会長 天野勝昭
 編集長 楠 敏明
 新事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野 504-1
 山崎泰二方
 自宅電話（兼用） 086-276-6654
 FAX（専用） 086-276-2241